

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02046

研究課題名(和文) 口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究

研究課題名(英文) A Study of the later Tibetan Madhyamaka thought based on combining the oral tradition and philology

研究代表者

西沢 史仁 (Nishizawa, Fumihito)

大谷大学・文学部・研究員

研究者番号：50646643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、チベットに伝承された中観思想の成立とその歴史的展開を解明すべく、特に十五世紀以降のゲルク派の中観文献を主資料として、そのための研究の基礎付けを行うことである。具体的には、チャンキヤ(1717-1786)の『教義書』中観派章の読解と翻訳作業を通じて、インド及びチベット初期中観文献との比較対照を行い、その思想的前提と独自性を解明することを目標とする。方法論的には、従来のText Critiqueに基づく文献学的手法のみに基づくのではなく、応募者の十年間にわたるチベット僧院修学経験を生かし、そこで収集した口承情報を十二分に活用した新しい仏教教学研究の方法論の構築を試みた。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this study is to elucidate the later Tibetan Madhyamaka thought transmitted in dGe lugs pa (Gelug school). Especially I have focused on the Madhyamaka chapter of the philosophical text composed by lCang skya rol pa'i rdo rje (1717-1786), so called lCang skya grub mtha', and completed its translation into Japanese comparing with early Tibetan Madhyamaka texts, not only of dGe lugs pa, but also of some important scholars of other schools. In this study, I have tried to establish a new methodological approach to the text by combining a textual study based on a philological method or text critique with oral information that I have accumulated in Tibetan monasteries for ten years.

研究分野：人文学

キーワード：チベット仏教 中観思想 チャンキヤ教義書 チャパ ニマタンパ・シェーラブジンパ

### 1. 研究開始当初の背景

これまでの日本のチベット仏教教学研究は、中観研究に限らず、文献研究が主体であった。既に仏教が消滅して久しいインドとは異なり、チベットにおいては、現代に至るまで、仏教教学研究の生きた伝統が綿々と存続しているのであるが、それを踏まえた上での教学研究は、残念ながら、今日に至るまで、ごく一部の例外（ツルティム・ケサン等）を除き、殆ど見られないのが現状である。そのため、その研究や翻訳には、往々にして多くの誤りや問題点が見出される。

他方、海外の学界、特に、アメリカにおいては、その当初から、チベット僧を招聘して、その指導の下に、教学研究が為されてきた（Jeffrey Hopkins 等）。それは確かに貴重な研究成果を生み出してきたが、日本とは全く逆に、その研究の多くは、口承情報のみに基づくものであり、文献学的基礎付けを欠くという欠点があった。

このような状況に鑑み、研究代表者（西沢）は、1998年から2008年にかけて、セラ寺やデプン寺等のチベット僧院（ゲルク派）に入寺し、伝統的な流儀に基づき、論理学・般若学・中観学の三部門を中心として研究を積み重ねてきた。その過程で、僧院には、テキスト上には現れないが、その読解には不可欠な知識が師から弟子へと口伝の形で伝えられていることに気が付いた。それは、端的には、師資相承という形で伝承されてきた《テキスト解釈学》と称されるべきものである。そして、その習得のため、2002年から、凡そ五年間に渡りデプン寺ロセルリン学堂の「法苑（チューラ）」と称される問答道場に入り、チベット語を通じて教義討論の修練を積んできた。法苑にまで入って研究を積んだ研究者は、欧米でも稀少であり、Georges Dreyfus 等数える程しかいない。日本では、河口慧海と多田等観を除くならば、恐らくは研究代表者のみである。

研究代表者のチベット仏教教学研究の成果の一部は、日本帰国後に博士論文（西沢2011）として結実した。それは、論理学研究を主題としたものであるが、1. 歴史研究（第一巻）、2. 教義研究（第二巻）、3. 文献研究（第三巻）の三部門からなっている。これは、研究代表者が目指す《口承と文献学の融合に基づくチベット仏教教学研究》の一例である。本研究は、そこで試みた方法論を、チベット中観学研究に適用することを目指したものである。

前述したように、口承情報に依拠しない文献研究は、それが如何に文献学的手法の点から十全に見えるものであっても、テキスト読解という点で不完全なものである。他方、僧院内の口承情報は、テキスト読解には必須であるとはいえ、そのテキストの文献学的背景を明らかにしてくれるものではない。さらに、僧院内での教義研究は、端的には、その宗派の《宗学》の域を出ず、自宗の教義を批判的

に検討することは事実上困難な現状がある。その際には、文献学に基づいた批判的な考察が必要となってくる。それ故、その教義研究には、文献学的研究と口承研究の二つを組み合わせることが必要となってくるのである。

口承研究のためには、口承情報の記録と保存が必須である。口承情報は、具体的には、講義（ペティ）の際に師から弟子へと伝承されるが、研究代表者は、十年間に渡る僧院滞在中に聴講した講義は基本的に全て録音して音声データとして保存してある。加えて、僧院内の図書館で多くの講義CDが発売されているが、その大部分は購入して、何時でも利用できる状態にある。

以上が本研究の学的背景である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、チベットに伝承された中観思想の成立とその歴史的展開を解明すべく、特に十五世紀以降のゲルク派の中観文献を主資料として、そのための研究の基礎付けを行うことである。具体的には、チャンキャ（1717-1786）の『教義書』中観派章の読解と翻訳作業を通じて、インド及びチベット初期中観文献との比較対照を行い、その思想的前提と独自性を解明することを目標とする。方法論的には、従来の Text Critique に基づく文献学的手法のみに基づくのではなく、研究代表者の十年間にわたるチベット僧院修学経験を生かし、そこで収集した口承情報を十二分に活用した新しい仏教教学研究の方法論の構築を試みる。これをもって、今後のインド及びチベット中観思想史研究の予備的研究となすことを目的とした。

### 3. 研究の方法

ゲルク派の中観研究については、これまで、開祖ツォンカパ・ロブサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）の著作の研究が主になされてきた。但し、僧院では、「イクチャ（Yig cha）」と称される学堂教科書が多数出版されており、ツォンカパの著作を研究する前段階において修学されている。これは特殊な問答体で記されており、その理解には問答の知識と経験が必要なため、これまで殆ど研究の手が付けられてこなかったものだが、難解なツォンカパの中観思想をより簡略で明解な形で解説したものであり、ツォンカパの中観思想研究には、或る意味、必須の文献群である。本研究では、十八世紀のゲルク派の学僧チャンキャ・ロルペードルジェ（lCang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786）により著作された学説綱要書、通称、『チャンキャ教義書』（lCang skya grub mtha'）を主資料とした。

『チャンキャ教義書』（Grub mtha' thub bstan lhun po'i mdzes rgyan）

(1) 中観自立派章 (民族出版社本 pp. 224-280 ; 英訳 : Donald S. Lopez, A Study of Svātantrika.)

(2) 中観帰謬派章 (同本 pp. 281-364 ; 英訳 (部分訳) : Jeffrey Hopkins, Emptiness Yoga.)

同書を選択した理由は、同書が教義書文献の中でも白眉と評されるものであり、そこには難解な中観派の教義が過不足なく簡潔に解説されているからである。分量的にも、適度であり、これ一冊でゲルク派の中観思想の概要を得ることが出来る。

『教義書』中観自立派章は、2006年にセラ寺ジェ学堂のゲシュ・ガワンサンギェ師の下で聴講し、『教義書』中観帰謬派章及び『中観総義』は、2008年に同師の下で聴講した。その際、その講義の録音、備忘録の作成、部分的な試訳は講義聴講中に遂行したが、まだ、翻訳及び註記の作成は未完の状態であったので、本研究では、研究会を発足し、再度、同テキストの全体を講読することを通じて、その完成を目指した。

中観派章には、ロペツやホプキンスの英訳 (部分訳) があるが、誤訳が散見され、関連文献の参照が十分ではないきらいがある。

そこで同書の思想的背景を解明する為に、関連文献の読解をも同時に進めた。無論、時間の関係上、膨大な関連文献の全てを読解することは不可能なので、本研究では、特に、以下の文献の読解に焦点を当てることにした。

(1) ツォンカパの『善説真髓』の中観派章等の初期ゲルク派の中観論書

(2) チャパ等の初期チベット人学者の中観論書 (『中観東方三論提要』等)

(3) サンプ寺ニマタン学堂の学僧シェーラプジンパ (Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa, ca. 1645-1715) の中観論書 (大谷大学図書館にウメ書体の写本が所蔵されており、同大学より、『中観学説決択集』(臨川書店、1990) として影印出版されている。)

以上の諸文献の読解を進める為に、研究会 (チベット古文書学研究会) を発足して、定期的に参加者と共に一連のテキストの講読と討論を行った。

#### 4. 研究成果

研究成果としては、研究の主目的である『チャンキヤ教義書』中観派章の全体を研究会で講読し、その翻訳作業を完了するとともに、その成果の一部を学会で公にした。本書全体の翻訳は近い将来出版するよう準備を進めている。

併せて、一連の関連文献のうち、ツォンカパの『善説真髓』中観派章の全体とシェーラプジンパの『二諦精解』の一部をも研究会で

講読して、その翻訳を行い、その成果の一部を学会で公にした。

チャパ等の初期チベット人学者の中観論書については、研究会では時間の関係上取り上げる余裕がなかったので、個人的に研究を進め、その成果の一部は学会で公にした。

各年度の具体的な研究内容とその成果は、以下の通りである。

##### (1) 平成 27 年度

『チャンキヤ教義書』中観派章の前半部 (総論及び自立派章、民族出版社本 pp. 190-281) の全体を研究会にて講読、参加者と共にその内容を討論し、全体の試訳を完成した。

同時に、シェーラプジンパの『二諦精解』の写本の読解と講読をも平行しておこなった。同写本に見られる「クンイク (sKung yig)」と称される特殊な隠字体の読解作業については、連携研究者の三宅伸一郎氏等の協力を得、第 63 回日本チベット学会のチベット学情報交換会において、三宅連携研究者と共同で、「sKung yig について」という題目で発表を行った。

研究会とは別に、個人的に、チャパ・チューキセンゲの中観綱要書である『中観東方三論提要』や『二諦精解』等の講読、及び、ゲルク派の一連の論師の論書 (ツォンカパの『善説真髓』、ケードゥブジェ (mKhas grub dge legs dpal bzang, 1385-1438) の『福縁開眼』、セラジェツウンパ (Se ra rje btsun chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544)、パンチェン・ソナムタクパ (Pan chen bsod nams grags pa, 1478-1554)、ジャムヤンシェーパ ('Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1722) 等の中観綱要書、ジャムヤンシェーパの『大教義書』等の講読を進め、関連情報の収集作業に入った。

##### (2) 平成 28 年度

前年に引き続き、『チャンキヤ教義書』中観派章の後半部 (中観帰謬派章、民族出版社本 pp. 281-364) の全体を研究会にて講読、参加者と共にその内容を討論し、全体の試訳を完成した。これで、『チャンキヤ教義書』中観派章全体の翻訳が完了したことになる。

併せて、前年同様、シェーラプジンパの『二諦精解』の講読を研究会において継続し、個人的に、チャパや一連のゲルク派の諸論師の中観典籍の講読及び関連情報の収集作業をも併せて行った。

##### (3) 平成 29 年度

当科研究最終年度なので、研究の主要目的である『チャンキヤ教義書』中観派章の翻訳研究の完成を目指した。特に、同書に思想的背景を解明すべく、初期チベット中観典籍として、既に読解を進めていたチャパの著作以外にも、チャパとほぼ同時代人のサンプ系学者であるトルンパ (Gro lung pa blo gros

'byung gnas) やギャマルワ (rGya dmar ba byang chub grags) 等の典籍(トルンパの『教次第』, ギャマルワの『二諦分別論註』) の読解にも着手した。

さらに, 研究会では, ゲルク派の中観思想を考える上で最も重要なテキストの一つであるツォンカパの『善説真髓』の中観派章を講読を開始し, 年度内にその全体の講読と翻訳を完成した。併せて, シェーラプジンパの『二諦精解』の講読も継続し, その全体の翻訳を完成した。

以上の一連の研究成果の一部は, 下記の雑誌論文及び学会発表において公にした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

①西沢史仁, チャパ・チューキセンゲの直接知覚論 — 直接知覚と対象確定作用の関係を中心として —, 印度学仏教学研究 64-2 (2016), pp. 71-75, 査読有。

②Nishizawa Fumihito, Reconsideration on a Perception and an Object-ascertaining cognition, インド論理学研究 9 (2016), pp. 145-164, 査読無。

③西沢史仁, チャパ・チューキセンゲの中観思想 — その独自性と思想的背景 —, 日本西藏学会々報 62 (2017), pp. 25-39, 査読有。

④西沢史仁, 中観帰謬派の開祖 — ゲルク派の伝承を中心として —, 印度学仏教学研究 65-2 (2017), pp. 95-100, 査読有。

⑤西沢史仁, ニマタンパ・シェーラプジンパ — その事績と著作について —, 真宗総合研究所紀要 35 (2018), pp. 121-124, 査読有。

⑥西沢史仁, 初期チベット中観思想における空性理解 — ゴク翻訳師, トルンパ, ギャマルワ, チャパ —, 日本西藏学会々報 64 (2018), 出版予定。査読有。

[学会発表] (計 6 件)

①西沢史仁, チャパ・チューキセンゲの直接知覚論 — 直接知覚と対象確定作用の関係を中心として —, 日本印度学仏教学会 第 66 回学術大会 (2015, 高野山大学)。

②西沢史仁, チャパ・チューキセンゲの中観思想 — その独自性と思想的背景 —, 第 63 回日本チベット学会 (2015, 四天王寺大学)。

③Nishizawa Fumihito, On pratyaksa and niscaya/adhyavasaya — focused on the interpretation of Tibetan scholars of gSang phu monastery, 第 14 回国際チベット学会 (IATS, 2016, ベルゲン大学)。

④西沢史仁, 中観帰謬派の開祖 — ゲルク派の伝承を中心として —, 日本印度学仏教学会 第 67 回学術大会 (2016, 東京大学)。

⑤Nishizawa Fumihito, On the Origin of

Non-valid Cognition (apramana/ tshad min gyi blo), 第 18 回国際仏教学会 (IABS, 2017, トロント大学)。

⑥西沢史仁, 初期チベット中観思想における空性理解 — ゴク翻訳師, トルンパ, ギャマルワ, チャパ —, 第 65 回日本チベット学会 (2017, 仏教大学)。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

西沢史仁 (NISHIZAWA Fumihito)

大谷大学・文学部・研究員

研究者番号 : 50646643

##### (2) 連携研究者

三宅伸一郎 (MIYAKE Shinichirou)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号 : 00367921